

BIWAKO BIENNALE 2007

風土—Genius Loci

BIWAKO ビエンナーレ 2007 “風土—Genius Loci”

BIWAKO ビエンナーレについて

2001年に産声を挙げた **BIWAKO ビエンナーレ**、2004年に2度目を、そして2007年、3度目を無事終了することができました。ビエンナーレといいながら3年に一度、その実トリエンナーレになってしまっているのですが…。

21世紀の幕開けとともに新潟県有トリエンナーレや横浜トリエンナーレなどが華々しく開催され、その後も日本各地で、ビエンナーレ、トリエンナーレという地域に密着した形での芸術祭が花開くようになりました。しかし、その多くが行政や市民団体が核となっているのに対し、名前こそそのひとつのような印象ですが、**BIWAKO ビエンナーレ**は、一個人の思いが募っての開催という点では全く違うかと思えます。

BIWAKO ビエンナーレは、海外生活が人生の半分以上になるという私個人の体験が元になっています。帰国する度に急激な変貌を遂げる日本、そして故郷、その有り方は本当に日本がなりたかった姿なのだろうか、と考え込まざるを得ませんでした。そしてそれとは逆に、現在住んで10年以上になるフランスやその他ヨーロッパの多くの町が、頑なにまでに古い町並みを守ろうとする姿勢、精神性には、心打たれると同時に多くの示唆を得たと思えます。

何にも増して私を憂えさせたのは“風土”の喪失です。日本にもヨーロッパのようにその土地にしか吹かない風“風土”があったはずですが。しかし駅前はおしなべて大型スーパーが建ち、国道沿いは日本全国津々浦々どこも同じようなチェーン店のけばけばしいネオンサインが横行しています。いったい日本の“風土”はどこにいつてしまったのでしょうか？時代を経た堂々とした建物を失うと同時に、いつの間にか日本は、安っぽい張りぼての建物のみが軒を連ねる、まさしく100円均一国家に成り下がってしまったのではないのでしょうか？そうした発展という名の下に無計画あるいは無節操に増え続ける建築群はさらに50年後にはどうなっていくのでしょうか？50年を待たずして粗大ゴミとなっていく運命にあるのではないのでしょうか。100年、いや1000年を経てもなお、その美しい町並みを守り続けていくであろうヨーロッパとの違いを思うと暗澹たる気持ちにならざるを得ません。それはむしろ町に芸術や文化が自然に溶け込んでいる日常の状況の違いにあるかもしれません。建物だけがすばらしくてもそこに住む人々が生き生きと生活していなければ意味がありませんから。確実に人々の精神性というのは街に反映するものだということを忘れてはならないと思います。とすれば、現在の日本の貧困な街の様相はそのまま心の現われなののでしょうか。かつての日本の美意識はどこに置き去りにされてしまったのでしょうか？そしていったい日本は今、どこに向かおうとしているのでしょうか？そうしたさまざまな思いが集積し、とにかく何かできることをと暗中模索した結果、故郷で始めた活動が**BIWAKO ビエンナーレ**でした。

1回目は滋賀県大津市で、びわこホールロビー及びその周辺の公園を使つての開催。故郷にオペラバステイユにも引けを取らないりっぱなホールができたことに感激し、約1000㎡ある巨大なロビー空間にアーティストたちの作品を展示し、公共の場におけるアートの有り方を提案させていただきました。これがきっかけとなり、それまでは使われることのなかったロビーが、展示やパフォーマンスなど、さまざまな形で活用されるようになりました。

2度目の2004年からは場所を近江八幡に移し、旧市街に点在する空き家を会場に開催することになりました。3度目2007年もここで開催し、今後も活動拠点にしたいと思っています。近江八幡は豊臣秀次によって造られた情緒ある城下町です。お城こそ消失しているものの、碁盤の目状の町は変わらず、魚屋町、鉄砲町、馬喰町など当時そのままの名前が今も使われています。

2002年初めてこの町を訪れたとき、所々駐車場や、新しい建物にはなつてはいるものの、まだまだ色濃く残る昔のしつとりと落ち着いた風情に子供の頃の思い出深い情景が重なり、懐かしさでいっぱいになりました。こうした美しい場所がまだ日本にも、しかも故郷滋賀にあったのだ、とうれしく思うと同時に、これ以上貴重な建物を壊さず、今あるものはなんとか残していつて欲しい、という思いに駆られたのでした。町を歩いていると空き家となっている町家はすぐにわかります。それらは外側から見てもりっぱなものであることが窺えますが、長く放置されているために傷みの激しいものがほとんどで、商業都市として栄えた華やかかりし往時を偲ぶと、そのさみしい佇まいに胸詰まる思いがしました。そして、そうした頃に戻ることはできなくても、また違った形で、この町家たちが生き返ったらと願わずにいられませんでした。

商業で栄華を誇った町として似ているベニス、ビエンナーレ発祥の地としても有名ですが、商業都市としての終焉を迎え、その復興をアートに置くこと、また古い建物を決して壊さないことによって、みごとに世界の観光地へと転換を果たした点で見習うべきことが多いように思えます。

そうしたさまざまな思いを胸に、誰ひとりとして知る人のいない近江八幡を奔走。月日の経つ中、少しずつ賛同してくださる方も増え、2年近くを経てなんとか開催に漕ぎ着けたのでした。また2005年には、**BIWAKO ビエンナーレ**のみならず、常に地に密着した活動をしていこうとNPO法人エナジーフィールドを立ち上げました。

そして2007年、前回に引き続き近江八幡での開催が実現しました。3回のビエンナーレの間になんと多くの方々にお世話になったことでしょう。情熱だけを頼りに突っ走る私を脇で支えてくださる方々の存在なしには、決してなし得なかったプロジェクトです。そしてその結果は、関わってくださった方々の努力の結晶です。会期期間中のみならず、いや、むしろ、そこまでに到るプロセスの

中にこそ BIWAKO ビエンナーレの意義があるとさえいえるかもしれません。常々プロジェクト全体が作品であると申ししておりますが、目にはつかないプロセスにこそ BIWAKO ビエンナーレの醍醐味はあると思います。すばらしい結果はその地道な営みなしには決して生まれ得ないからです。

BIWAKO ビエンナーレ 2007“ 風土—Genius Loci”

さて、今回の BIWAKO ビエンナーレ 2007 は、そのタイトルも“風土—Genius Loci”とし、アーティストたちは、近江八幡という土地そのものとのコラボレーションに臨みました。町や建物に潜む目に見えない気配、木々や、風、水の精霊たちのひそやかな声に耳を傾けてみようという試みが、今回の BIWAKO ビエンナーレです。

主な展示会場として、使われていない古い建物を使用しましたが、現在営業中のカフェなどにも作品を置かせていただきました。

旧市街に点在する会場はそれぞれ歩いて 2 分～ 10 分という立地。すなわち、気持ちよく町を散歩しながら、それらを見て回ることでできる距離です。会場巡りが、観光では足を踏み入れることのない、碁盤の目になった旧市街に自ずと誘われるという結果になります。地元の人たちでさえ気が付かなかった新たな発見がそこにはあります。車社会は生活を便利にはしましたが、こうした町散策の楽しみを奪ってしまったのではないのでしょうか。BIWAKO ビエンナーレでは、近江八幡の町をゆったりと巡ることで、それぞれ自分自身の時間の流れを取り戻して欲しいとも考えました。また今回の会期は晩夏から秋そして初冬へと季節を跨ぐものとなり、緑なす蔦や木々の葉が日ごと色を変えていくさま、高い位置にあった太陽が傾きを増し、落ちる影を長くしていくさま、日本の美しい季節の機微を感じさせてくれる 50 日間となりました。その間、晴れの日あり、雨の日あり、その日その日で、作品は違った表情に見えます。また一日のうちにも朝と夕では、その陰影は変化し、そのときどきでの感動を与えてくれるのでした。

実に、アートは日常の風景を一変させる力を持っているのだと思わずにはいられません。アートが介在することにより、町全体も一層輝きを増すようです。普段見過ごしている何気ない場所や空間が作品によって饒舌に語りはじめるさまこそが、こうしたプロジェクトの一番の醍醐味かとも思います。作品自体その空間なしには成立しない、またその空間があるがゆえに意味を持つ、そこにホワイトキューブでは実現不可能な関係性が生まれます。古い建物の中で観客は作品に対峙するのではなく、むしろ作品と一体化するという体験をします。空間そのものが作品となっているこうしたプロジェクトにおいては、観客自身も作品の一部となる役割を担うと言ってもいいかもしれません。住み手を失い、長い眠りについていた空間そのものも作家達の手により、また観客達により、以前の凜とした尊厳を取り戻していきます。

幾多の生と死の錯綜が濃密に漂う空間は、その静けさゆえにより一層作家たちの胸の奥深くを泡立たせ、やがて作品となって昇華していきました。今回展示された作品の多くは新たに制作されたものですが、たとえ、過去に制作されたものであったとしても、そうした空間の秘められた力によって以前とは全く違った様相を呈し、新たな生を謳歌し始めるのでした。

BIWAKO ビエンナーレでは、あまり難解でコンセプチュアルな作品は展示されていません。むしろ直接魂に語りかけてくる無条件の感動を呼び覚ますものを、と心掛けています。“考える葦”である人間は思考の呪縛から逃れることはできないでしょうが、純粹に、言葉には成し得ない感動を心で感じとることもできるはずです。それは、意図して生まれてきた人間などひとりとしておらず、唯一平等に与えられた“死”というその瞬間が訪れるまで生きることを余儀なくされる理不尽な存在としての自己の探求、また、どれほど悠久のときが流れようとも、決して解明され得ない生命の不思議さに対する畏敬の念にも通じるものかもしれません。人生の中で、人はいったい幾度、魂に響く珠玉の瞬間に出会うことができるでしょう。慌ただしく過ぎ去る日々の中、ふと立ち止まるときに、BIWAKO ビエンナーレでの感動の体験が、各々の心の中でほんのりと光を放つ、そうしたひそやかな、しかし忘れ得ないもののひとつになって欲しいと願っています。

今後も、琵琶湖という日本の母なる湖に敬意を表し、そこに吹く風を感じながら、こうした活動を謙虚に続けて参りたいと思っています。BIWAKO ビエンナーレが、日常の中で人々が見過ごしがちな、ささやかだけれど大切な何かを思い起こしていただくきっかけになれば幸いに存じます。

最後になりましたが、BIWAKO ビエンナーレをともに遂行してくださった作家の皆様、活動を影で支えて下さったスポンサー様、スタッフの皆様、そしてこうしたプロジェクトを開催する機会を提供してくださいました近江八幡市の方々に心よりお礼申し上げます。

総合ディレクター 中田洋子

喜多利邸

Kitari tei





竹田 直樹
NAOKI TAKEDA

人は、人生に成功すると庭を作ることがあります。

たとえば皇帝や貴族や将軍、成功した商人の中には、大きな庭を作った人が大勢います。

自然の一要素である人間が、その自然を再構成して理想のものとするのが庭であり、それは人の究極の欲望が果たされた結果なのです。

それでは、現代の私たちの欲望とはどのようなものなのでしょう？

私は、かつての近江商人の欲望の痕跡が今なお色濃く残る喜多利邸の古い荒れ果てた庭に、現代の欲望を少し追加してみます。





小板橋 慶子
KEIKO KOITABASHI

離れてから初めて、地元・群馬をこよなく愛していたことに気付く。

群馬の繭を素材として用いるのは、自分なりの愛情表現。

お蚕さまの恩恵である、しろい繭に、自然から頂戴した色彩を重ねる。

喜多利での生活は、私にとって日常となったけれど、時折、非日常と感ずることもある。

そんな、この場所ですら成立することのない、錯綜空間。





田中 哲也 TETSUYA TANAKA

「空・近未来ノスタルジーについて」

2003 年から、「空 QOO」シリーズを展開している。

当初は、陶表現において、今までにはないものを目指して、陶をボルトで連結する技法を用いた。

しかし、数年発表をしていくうちにそれとは逆に、作品のなかにある種の懐かしさ、クラシックな要素が包括されていることが分かった。

作品を見た方から、幼い頃のテレビアニメを思い出すとか、昔の工場の雰囲気を持っているなどと言われる。

確かにこのシリーズは、空中に浮かぶ人工的なものをイメージしている。

子供の頃に空想した近未来的な飛行物体、そんな記憶が、ベースになっているのであろう。

作者と観客との間に同じ感覚が生まれる。

幼少の頃に夢見た輝かしい近未来、それを懐かしく感じる感覚、

それを「近未来ノスタルジー」と呼ぶ。





斎藤 寛
HIROSHI SAITO

私が育った滋賀県では今や失われつつある「家」制度が意識下に存在している。

そのような土地柄の下、私は長男として生まれ、漠然と「家」に対する責任感を感じながら育ってきた。

その中で、家や家族に対する責任感を重荷に感じる時がある。

仏壇は家、家族、先祖の象徴である。

仏壇や家を背負おうとするもの、継ぐもの、家を出ようとするもの。

それぞれの事情、立場、そしてそれぞれの主張があり、いろいろな長男がいる。

自分自身を見つめなおすために、

そして同世代の長男が家や家族を、自分をどのように考えているかを知るために、

このポートレートを撮っている。





満田 享
TAKASHI MITSUDA

今回のBIWAKO ビエンナーレでは、開催される近江八幡市や琵琶湖がある滋賀県に
関係のある植物や生き物などを、大小様々な切り絵で表現いたします。
そして紙を切り抜く切り絵だからこそ生まれる「光と影」を楽しんでいただければ幸いです。

「紅葉」
「ビワコオオナマズと蓮」
「ビワマス」、「ゲンゴロウブナ」、「ホンモロコ」、「ウツセミカジカ」
2007 年
紙（ミューズコットン、画用紙）





高見 晴 恵
HARUE TAKAMI

喜多利邸をはじめて訪れたのは、空が銀鼠色に曇った2月であった。

家には長い間に積み重なった、今は冬眠しているかのような時間が存在していた。

しかし建物の中の空気には、人を拒絶するものではなく反対に人の気配を心待ちにしている、そんな趣が漂っていた。

その中でもひとときわ固く閉ざされた「ぞうぐら」の扉についていた覗き窓をふいに見たとたん、私は、その蔵の中の闇の暗さに脱まれた。

そして、同時に言葉では言い尽くせない何かが私の中に生まれた。

水が器なしに形を保てぬように、

私の仕事は設置場所の光や空気や時間の器なしには存在できない。

今回は、闇がその積み重なった時間が、器となる。

自分の作ったものなど見えなくともよい、

何代もの人々の営みを凝視してきた蔵の悲哀が際立てば、それでよい。

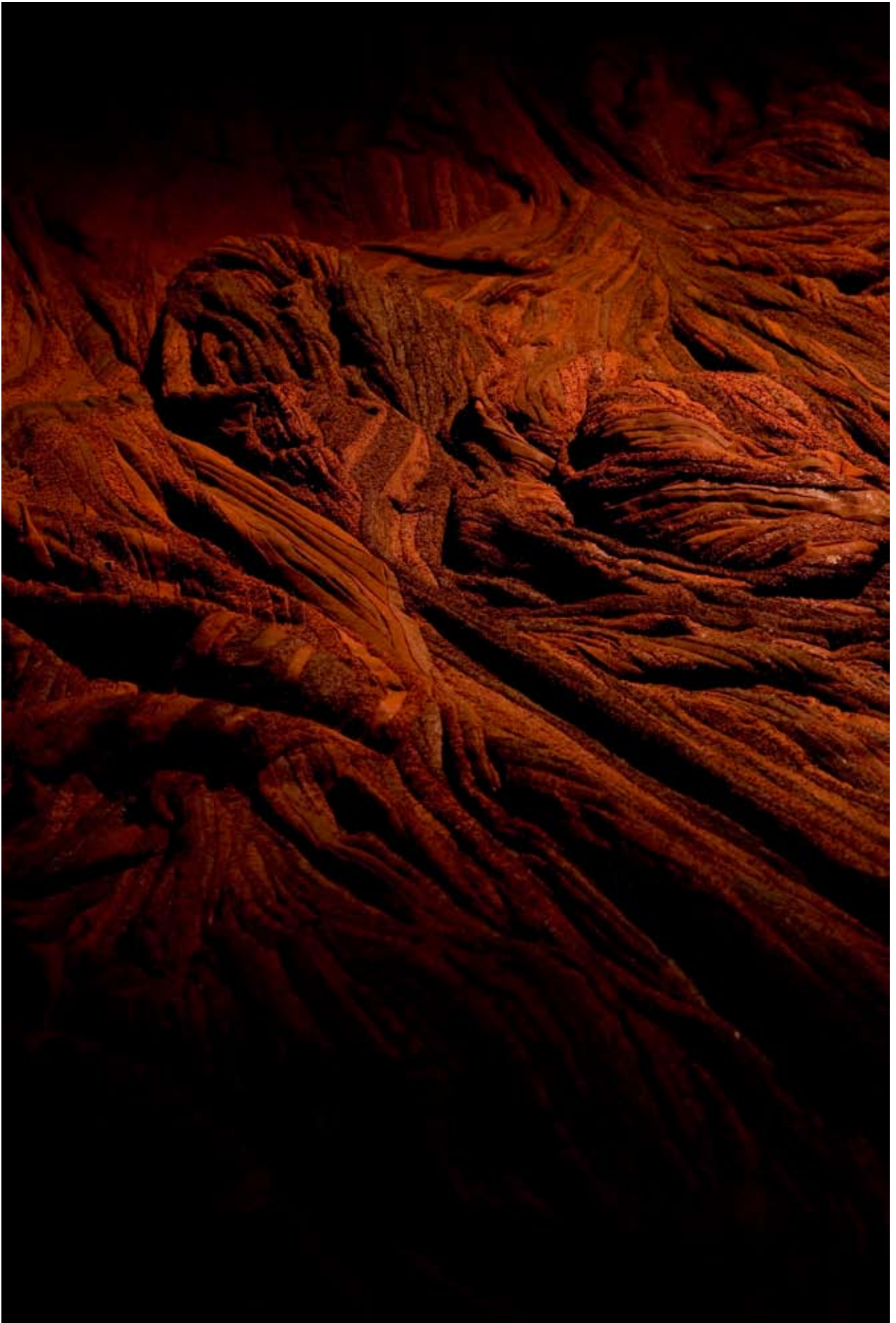
これが、蔵に脱まれた私の仕事である。





堀江 崇
TAKASHI HORIE

今回の作品は「風」をテーマにして作品を撮っています。
「楮」という種類の阿波で作られている和紙に印刷しました。
和紙を使う理由として光の透過の柔らかさと風合いが
私の作り出す作品のイメージと合致したからです。
また2重露光という手法を使い1つの写真の中に2つのイメージを
掛け合わせるにより「風」シリーズの作品が生まれました。
「風」を感じることができたでしょうか？
皆様に良き風が吹きますように・・・





田 辺 磨 由 子
MAYUKO TANABE

何かを生み出す事はとてもエネルギーがいる。
始まりはいつも混沌と渦巻くエネルギーの中から。
そこから何が始まるかは誰も知らない。
光もなく、ただただ蠢くだけ。
一体どれくらいの人が繰り返したか知れないこの行動。
いつか見つかる閃きはやがてまた大きなエネルギーとなって動き出す。
そんな始まりの瞬間を感じて頂ければと思います。





松尾 郁子
IKUKO MATSUO

～湖とその周りのストーリー～

「湖でできたプーケ。花雲から雨の糸。命から命が降る。脈々とつなぐ。

昼の星たち、眺める蝶のこども。見えずとも確かにある。」

ストーリーは既にそこにあり、ゆっくりと湧き上がってきました。

私の仕事はそれを見えるかたちにすること。

普遍的で根源的なテーマを軽やかなかたちにすること。

「lake flower」

2007 年

岩絵の具、カゼイン、ムードン白亜、他





シュテラ・ゲッペルト
STELLA GEPPERT

私は、部屋や建物を“それぞれの方法による行為の関連の中で変化を遂げた、依存性のなかに存在する複合的な構造物”と見なす。

そして私は関心を抱いてしまう、ムードの一変する空間、振る舞いの中に新しく形作られた瞬間、その空間が成立した瞬間の動きに。

さて私は、一見するととるに足らない存在として、それでもふさわしくない場所に、ひとつの花瓶を置いた。

そして花瓶の下の床に空間構造を超越する細工を施した。

すこしでも注意深くこの花瓶を観察した鑑賞者は、その中に広がる非日常的な視覚的体験に、自らの感覚をさぞ揺り動かされた事だろう。

私の仕事は、そのような鑑賞者の記憶を呼び覚ます事だ。

そしてそのような日常の中に潜む非日常的体験にこそ、かつて人は *Genius Loci* の存在を見取ったはずだ。

以前目にした神道について書かれた文章は、このようなインスピレーションを私に与えた。

カネ吉別邸

Kanekichi Bettei





石田 智子 TOMOKO ISHIDA

はじめてこの展示空間にお邪魔した時、電気もなく真っ暗で何も見えなかったのですが、案内の方が窓を開けてくださったらしく、突然、高い天窓のような小さな窓から、一条の光が差し込んできました。

私はその光によって、これまで見えなくて彷徨っていた自分をようやく認識したような気がしました。

作品が決まらず不安を抱えているようなとき、一所懸命であればあるほど、

自分で考え、自分の力で生きているような錯覚を起こしやすいですが、

何かの出来事や相手との出逢いがあったのはじめて、自分という存在を認識出来る気がします。

そして、限りなきご縁の中で生かして頂いていると感じます。

それはまるで「月」そのもの。照らされ方によってもまるで異なる存在となります。

小さな窓から刻一刻と陽の光が差し込み、時間と共に動き、変化します。

誰も来ない夜だって、窓からは宇宙の闇の「気」がたえず差し込んでいます。

止めることができない時間と共にこの光と自分が戯れる・・・

そんな一瞬を感じて頂けたらと願っています。

「心月輪（しんげつりん）」
2007 年
ロール紙、鏡、糊
直径 250cm





亀井麻里
MARI KAMEI

ほの暗い天井から雨のしずくが落ちてきた。

全てを潤す甘い甘い雨だった。

甘い雨の波紋から草が生まれた。

すると草達は甘い雨をうけて自ら草の冠をつくり回り一面に広がった。

小さな二階の部屋はひっそりと草の原に姿を変えていった。



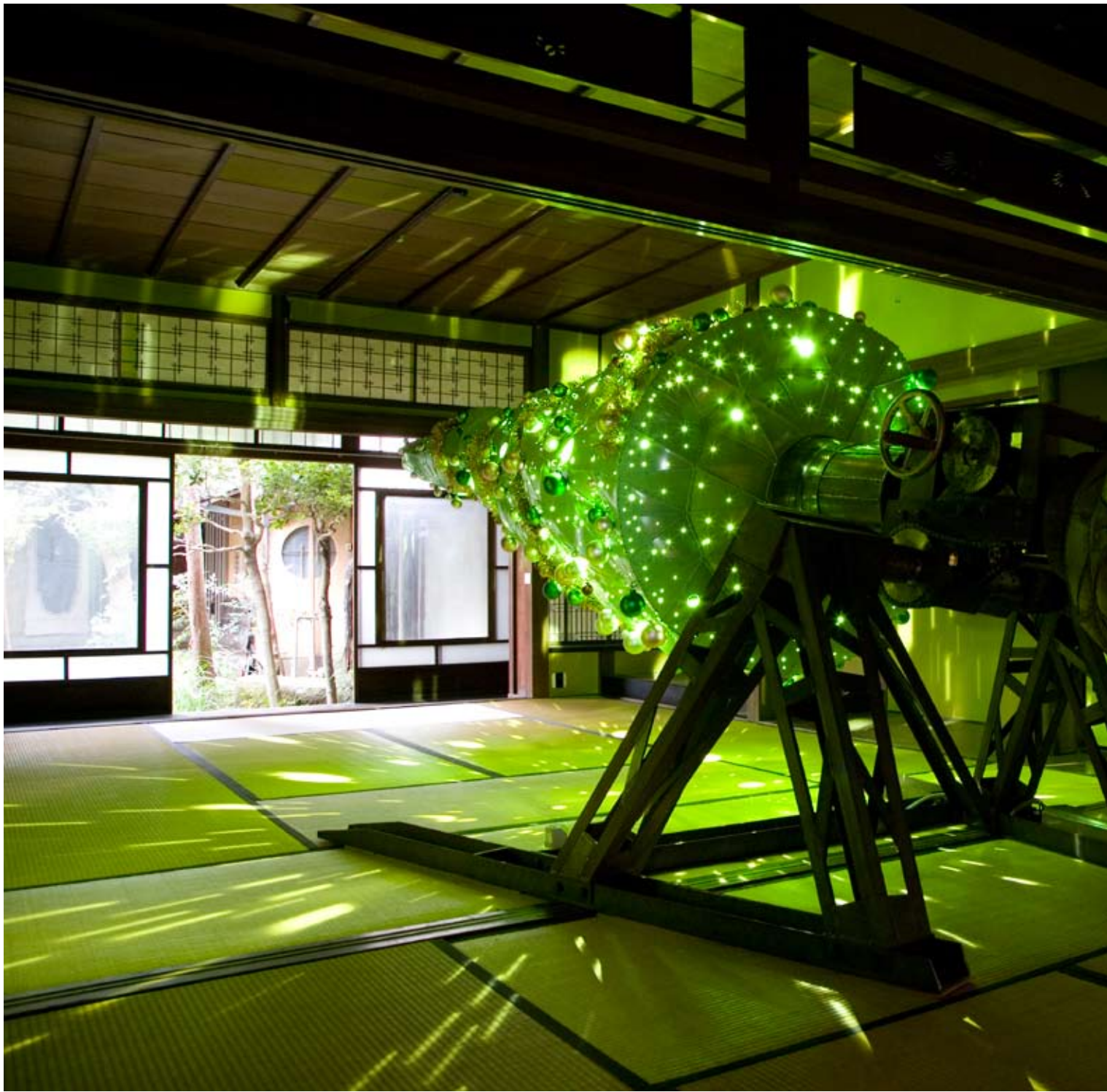


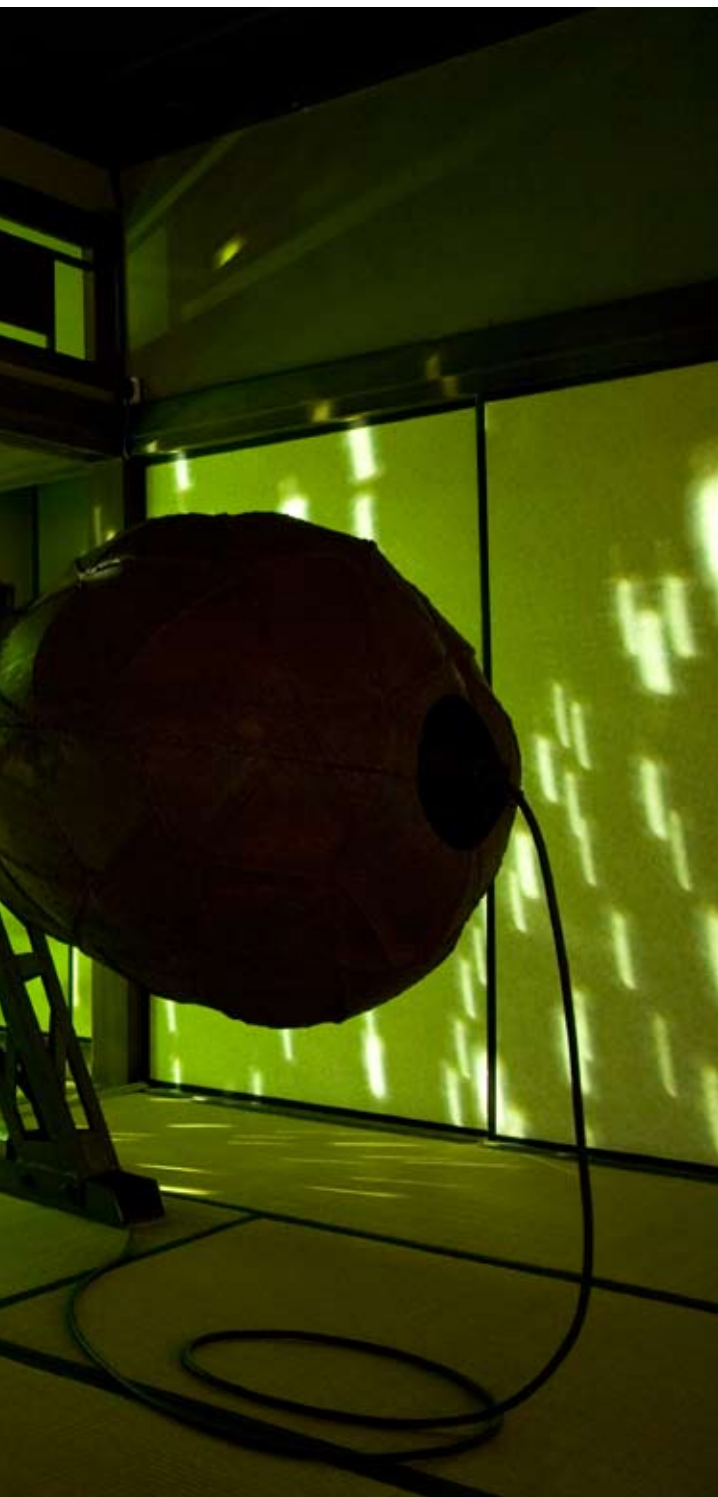
中川 佳宣
YOSHINOBU NAKAGAWA

人が「見上げる」という行為をとるとき、
眼差しは何に注がれているのでしょうか？
大樹に咲き誇る花や緑の葉から溢れる木漏れ日に、
生きていることへの喜びや悲しみに思いを馳せたり、
夜空に瞬く月や星たちを眺めながら、
とてもちっぽけで儚い人間の存在と向い合ったり、
大空を渡ってゆく鳥たちの群れを見つめながら、
憧れを抱いたりしているのではないのでしょうか？
だけど、その眼差しは決して悲観的なものではなく、
「生」に対してとても肯定的なものなのだと思います。
「見上げられしもの」とは、私たちの記憶の中にある憧れなのです。

an object looked up (form that can spend winter) #1
2007
acrylic, cotton, beeswax, string and cowhide on hand-made paper
h: 36, w: 32, d: 116 cm

light pot - arabesque #2
2006
acrylic, cotton, beeswax, string and cowhide on hand-made paper
h: 50, w: 34, d: 34 cm





市川 平
TAIRA ICHIKAWA

私が子供だった頃、「世の中は 1999 の夏で終わる。」という予言が流行った。
子供ながらに寿命の宣告を受けたように
その日までに何が出来るだろうと真剣に考えたものだった。
時は流れ幸い致命的なカウントダウンもないままに現在の生活がある。
遠い未来に照準を合わせた詐欺行為は昔からよくあるが、
「締め切り」がないと動かないのもまた人間の常である。
この作品はそんな、こんなを記憶に残すための未完のモニュメントなんです。





田辺由子
YOSHIKO TANABE

楊枝はどの家庭にもありながら、
普段気にもとめられず、使い捨てにされる空気のような存在である。
その多様な道具としての可能性に注目し、
長期使用に挑戦したのが「よーじ手芸プロジェクト」の発端の過去の作品「よーじ編み」。
今回はさらにその使用法を拡大し、
楊枝を針代わりにした「よーじ刺繍」の公開リレー制作を会期中 50 日間行う。
会場には学生による制作ボランティアが常駐、
ともに作業することで来場者との交流をはかりながら、
日々形を変えて行く「よーじ刺繍」の予測できない行方を楽しむ作品である。





泉理恵
RIE IZUMI

私は、あれこれ色んなことを考えて作品を作っているのだけど、
そして何らかの器となるものを作りたい、と思っているのだけど、
結局、私も、私の作品も、地球という器の小さな突起物でしかない。
——「でしかない」は悲観的？
でも私はそれに気付いたとき、楽しくなった。
へんてこな突起物。
へんてこな突起物に虫が這っている。
いつか、根を張った木が伸びて、
私の作ったものをパコッと割ってくれる日を、
私は夢想するのだ。

旧伴家住宅

Kyu Banke Jyutaku





「Urbanus (ウルバニウス)」
2006 年
鉄、メタルハライドランプ、電子制御装置
103 × 103 × 241 cm — 389 × 389 × 233 cm



チェ・ウラム
CHOE U RAM

国際的運営組織、「機械生命連合研究所 (略称 U.R.A.M-United Research of Anima Machine)」が最近発表した新生態系の発見に関する研究成果は驚くべきものであった。都市エネルギーの研究者たちの間で一大センセーションを巻き起こすことになろう。U.R.A.M. の発表によると、この新しい機会生命体は太陽エネルギーを基盤として光合成する植物と極めて類似するが、この生命体は都市エネルギーを直接吸収し活動しているメス、及びメスが排出する光形の電気的エネルギーを吸収して活動するオスに分類される。U.R.A.M. はこの新しい機械生命体に「都市を愛する者」という意を含めウルバニウスと名付けた。ウルバニウスのメスは花のようなかたちをしており、収集されたエネルギーを光として放出するため、約 15 分の間隔で葉を広げる。メスの生殖器官からの発光に至っては、多量の電荷を持った粒子が一緒に放出されるので、周りを徘徊しその瞬間を待っていたオスたちは自らの葉を広げてその粒子を吸収する。ウルバニウスは都市エネルギーの動きが一番活発な都市上空（高度約 200 メートル付近）で主に生活すると見られ、超高層ビルの上層や屋上で発見されることが多い。精神的に、空を眺めることを楽しむほどの余裕を持たない現代の都会人によって発見されることは稀少であるが、子供たちからは「上空でウルバニウスを見つけた」という目撃情報が聞かれることもある。ウルバニウスは主に夜間に活動するので、夜間撮影された都市の衛星写真に写っていることもある。人間の都市文明、生活文化と深い因果関係があることが示唆されるため、将来、更なる研究が必要であろう。

この作品は過去に作成したものではあるが、この巨大な美しい日本建築空間に置くことで、以前にも増し、生き生きと生息しはじめたように思う。同じ空間を共有することになった嶋田氏の韓国語によるタイトル、国“NARA”から十分な栄養を頂戴することができ日を追うごとに作品も育っていくのごとくであった。このような、空間や、他の作家とのコラボレーションの醍醐味は、他では味わえない貴重な体験であった。この町を知ること、日本の本当の良さを実感でき、親切に接してくださった町の方々にも感謝したい。





ガブリエラ・モラウエツ + パンチョ・キリシ
GABRIELA MORAWETZ + PANCHEO QUILICI

45 畳あるという奥行きのある大広間の魅力を最大限に引き出すように、映像と現地で調達できる竹と綿を使つての五角形の輪郭をもつた円錐系の構造物のインスタレーションを行った。

五角形は人体を表わし、それが、円錐状に奥へと収斂していくことにより、無限を象徴するとともに、自己の内面へと深く沈潜していくことをも表現している。

映写幕自体も五角形をしており、そこに、ひとりの女性が赤い糸で一心に何かを紡いでいる情景と、透明な球体が森の中の果てしない道を駆け巡る情景とが、ランダムに映し出される。

赤い糸は紡がれる女性の人生、運命、また内面の象徴である。

実のところこの映像作品を作成した段階では、展示場所となる旧伴家住宅が長く女学校であったこと、さらに45畳敷きの広間が裁縫室として使用されていたことは、全く知らなかったのであるが…。後にその事実を知るに及び、そこにも見えない運命の赤い糸を見る思いがした。

今回、使用させていただいた綿や竹は、地元の方から提供していただいたもので、竹という素材を使用することも初めての経験で、作成するにあたり、地元の方々の指導、協力を賜ったことに深く感謝したい。





西田明夫 AKIO NISHIDA

動くおもちゃ、からくり人形のデザインと製作を手がけています。

「まるでおもちゃのよう」とか、「まるでおもちゃのように扱われた」、といったフレーズが日常的に聞かれるように、「おもちゃ」という言葉には、「つまらないもの」「本物ではないもの」「手慰み」、というような意味があります。

ある幼稚園における体験ですが、その幼稚園では大勢の子どもたちが園庭で遊んでいました。チャイムが鳴り、担任の先生が、「お遊びの時間は終わりました」「さあ、お部屋に戻しましょう」、と子どもたちに告げた時、一人の園児がその先生のところに駆け寄り、「先生、もうお遊びの時間はおしまい？」「だったら、もう遊んでもいい？」、と訊ねるという出来事がありました。先生は「お遊びの時間」というカリキュラムを子どもたちに押し付けていただけだったのです。

遊びとは本来「能動的」であり、「自発的」な行動であるべきだと考えています。授業の一環とはいえ、その子どもにとっては、先生から押し付けられた遊びは「遊び」ではなかったのです。

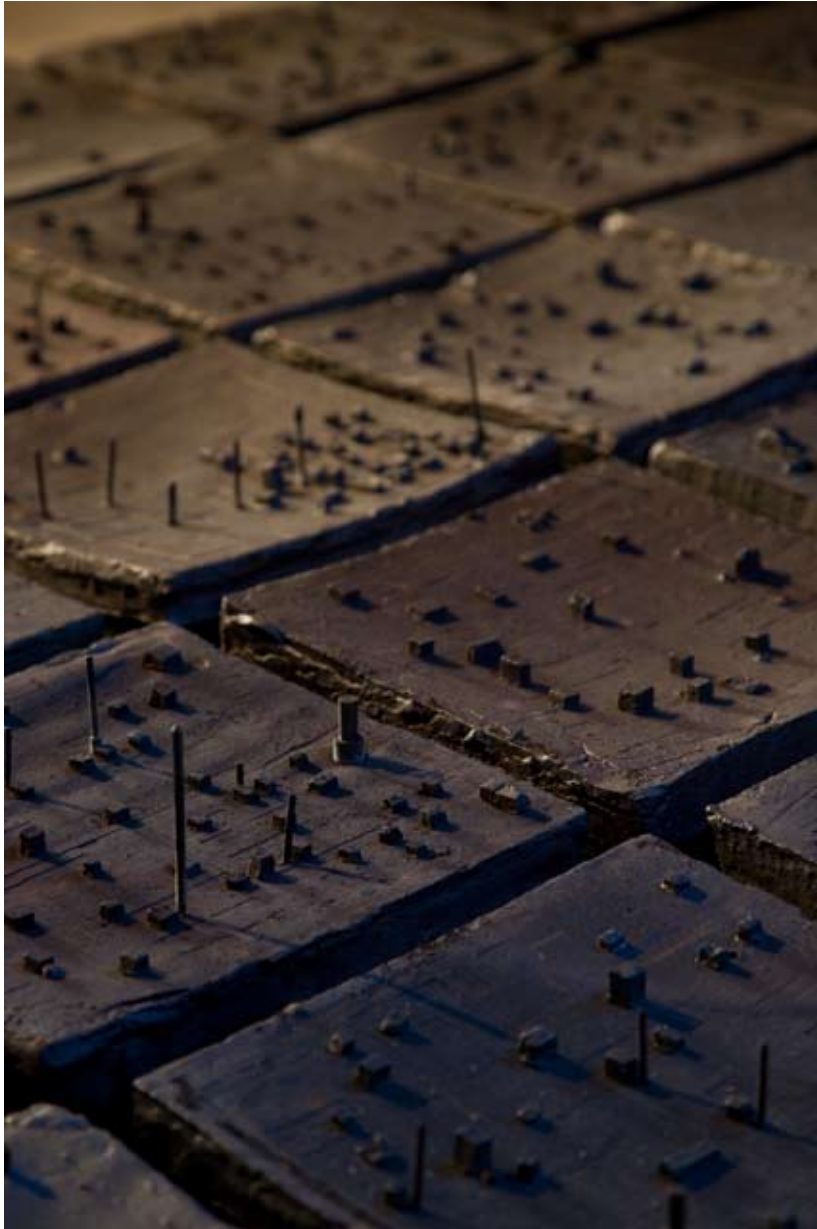
「おもちゃ」は「遊ぶための道具」です。逆に言えば、人が能動的、かつ自発的に遊べる道具でなければ、それは「おもちゃ」ではないのかもしれません。

BIWAKO ビエンナーレの会場では、実によくの方々に興味をもって遊んでくださいました。

「おもちゃは遊ばれてこそおもちゃ」そのように思います。

「草競馬」
「魔女の綱渡り」
「タイタニック」
「森の生活」
「プルチネッタ」
「メカニカル・バー」
「ウィンキー・ジェニー」
「おもちゃの兵隊」
1998－2007年





嶋田 健児
KENJI SHIMADA

一見、豊かで自由な現代社会。

豊かさの裏側に見える社会の荒んだ光景は

私の中で灰燼に帰した戦後の町並みとオーバーラップします。

近年発展の象徴であるテクノロジーと、廃絶した街をモチーフに、
平和の影にある荒んだ現代社会の心象風景を表現しています。

でも、絶望的な事はありません。

廃墟は繰り返される歴史です。それは再生への一歩でもあります。

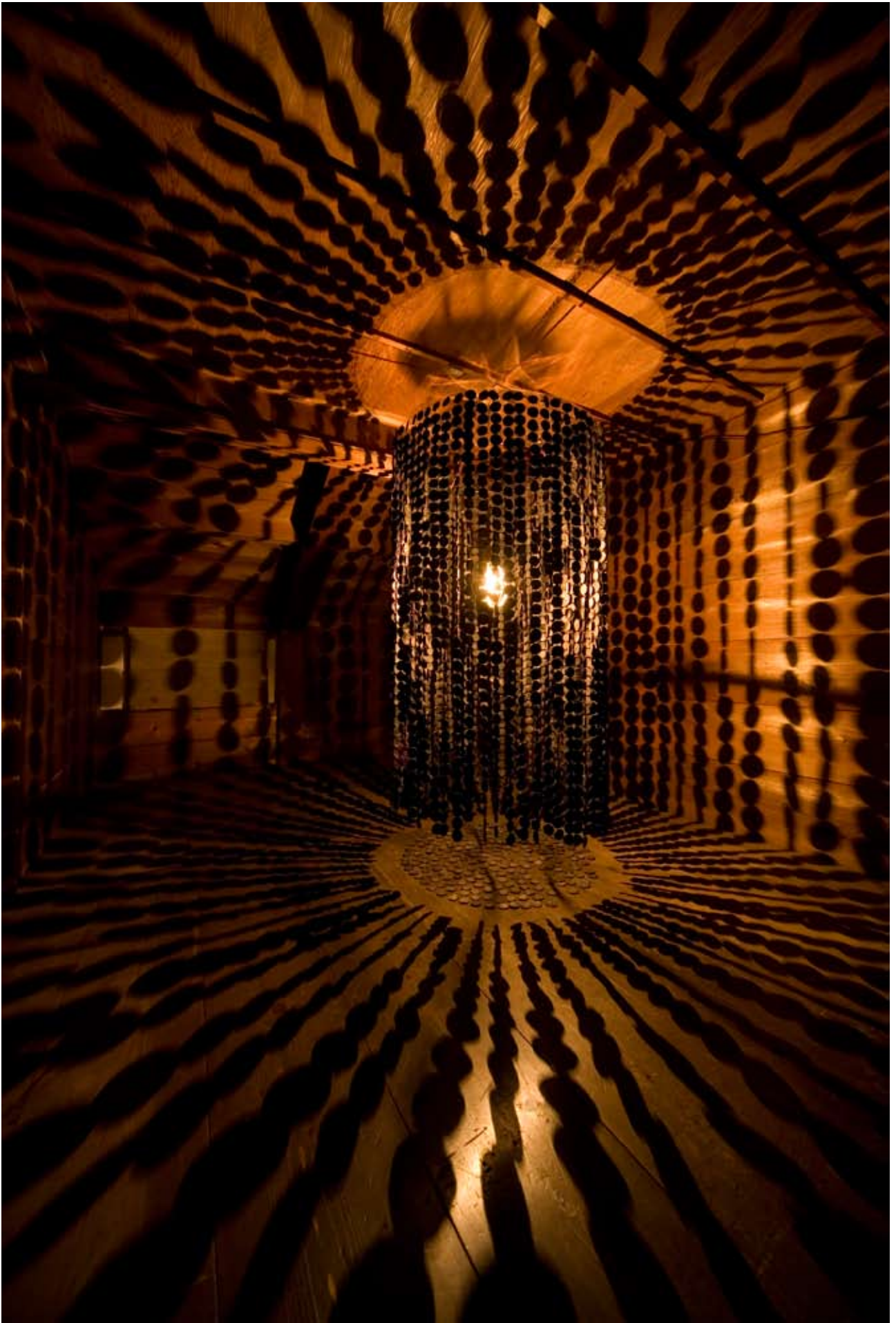
土という素材も、繰り返された歴史や生命を語ってくれます。

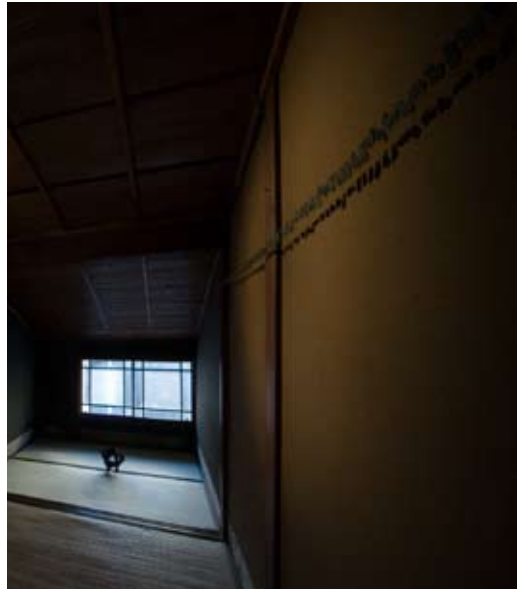
壊れたもの、廃絶されたものにもう一度命を吹き込みましょう。

作品を見られた方々が、それぞれ新たな一歩を感じて頂きたいと思います。

尾賀商店

Oga shouten





田中太賀志 TKASHI TANAKA

炭化すること

炭化することは物質をミニマル化することだ。究極のミニマルアートだ。

物が窯にいれられ、炭になるとき、様々な分子構造から単なる炭素の構造体に変化する。

炭素以外の物を消失して、炭素の構造体になる。これが炭化だ。

物をミニマル化して最小限の構造体になったとき、その本質が見えてくる。

そこから、新しい造形が創造できる。

クッキーは工業製品である。同じ条件で工場で作られたクッキーが炭になると

一枚一枚違った形に変形する。素材としてレディメイドを使うこと。

誰もが知っている素材が炭化することで少し形を変えて、新しい造形を作ってみたい。

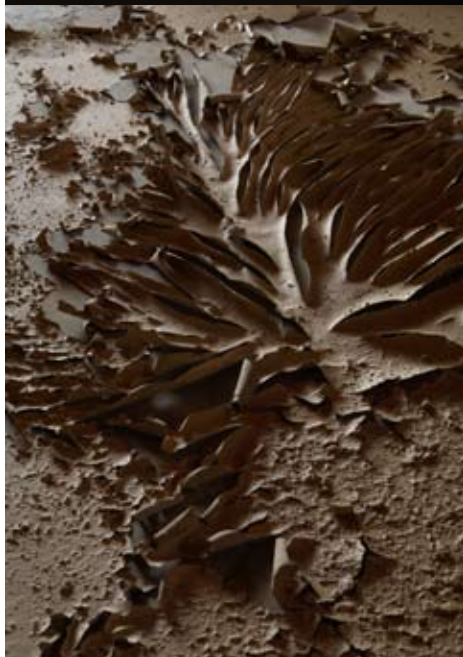
テーマは生命力。生命体は死ぬとその骨格をなす炭素を放出する。

そして再び新しい生命体に取り入れられる。

大自然のリズムはこの炭素の循環によってまかなわれる。死と再生のリズムである。

生命力あふれる造形とは。そのリズムの中にヒントがあるかもしれない。





津田直 + 片桐功敦 + 久住有生
NAO TSUDA+ATSUNOBU KATAGIRI+NAOKI KUSUMI

昨年の夏 天文台長と話をした際 彼は
見えている星は 僕達にとっての太陽と同じものだと語った
全ては燃えながら 生きているのだと 僕は今年の
夏の終わりに星空を作品にしようと思っている
無数の星を一つずつ集め 炎に包まれた彼方を
ここまで引き寄せて
放とうと思っている

七月三日 津田直

向日葵 という花がある
その名前は いつも太陽を追いかける性質に由来する
彼方から届いた一夏の光を 体いっぱい溜め込み
秋 無数に種を宿し こうべを垂れる花 向日葵
風の中 項垂れるその姿は 途方に暮れているのか
はたまた これから新たな命を宿す大地に
祈りを捧げているのだろうか

八月十六日 片桐功敦

今年の春、トルコへ旅に出た。
何万年もの時間が作り上げた、奇妙に尖った風景。
その中には無数に穿たれた横穴がある。
それは、その先にある営みに続く小さな入り口だった。
穴を掘っただけの簡素な住処は、今は主を失い
静かに土に還ろうとしている。
同じだけの時間をかけて。
今年、全ての物が辿る風化の時間を自分なりに表現したいと思っている。

八月二十日 久住有生

西勝酒造搾り蔵

Nishikatsu Shuzou-Shiborikura

酒游館

Shuyukan

旧吉田邸

Kyu Yoshida Tei

かわらミュージアム

Kawara Museum

浜ぐら

Hamagura

茶楽

Saraku

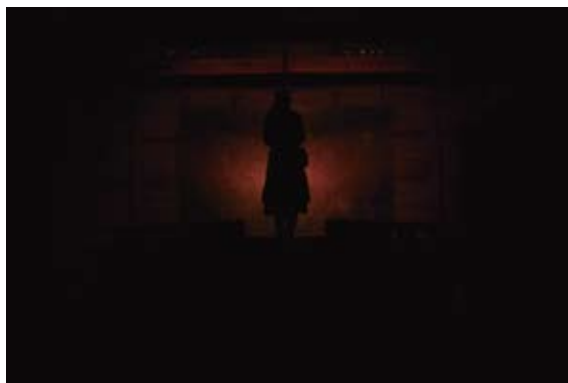
八幡堀

Hachimanbori

旧市街一帯

KyuShigai Ittai





大 船 真 言
MAKOTO OFUNE

進み行く時間は、同時に内包する過去を増やし続けることでもある。

今、この瞬間に自分が存在していることも、

自身の記憶を越えた遠い過去から織り成されているのであろう。

私にとって絵を描く行為は、未だ見ぬ光景を追い求める旅であり、
同時に遠い記憶に触れることでもある。

およそ300年の歴史を持つ酒造の元搾り蔵。

かつての記憶の追跡の上に橋を架け、向かう先に自身の絵画を繰り広げる。

場の記憶を一步步踏み締める中、ふと時代や国を飛び越えた感覚に触れた時、

その空間には限り無く今という時が流れ、目の前の光景と共に新たな記憶として心に刻まれていく。

天窓からは、当時と変わらず光が時を刻み続けている。

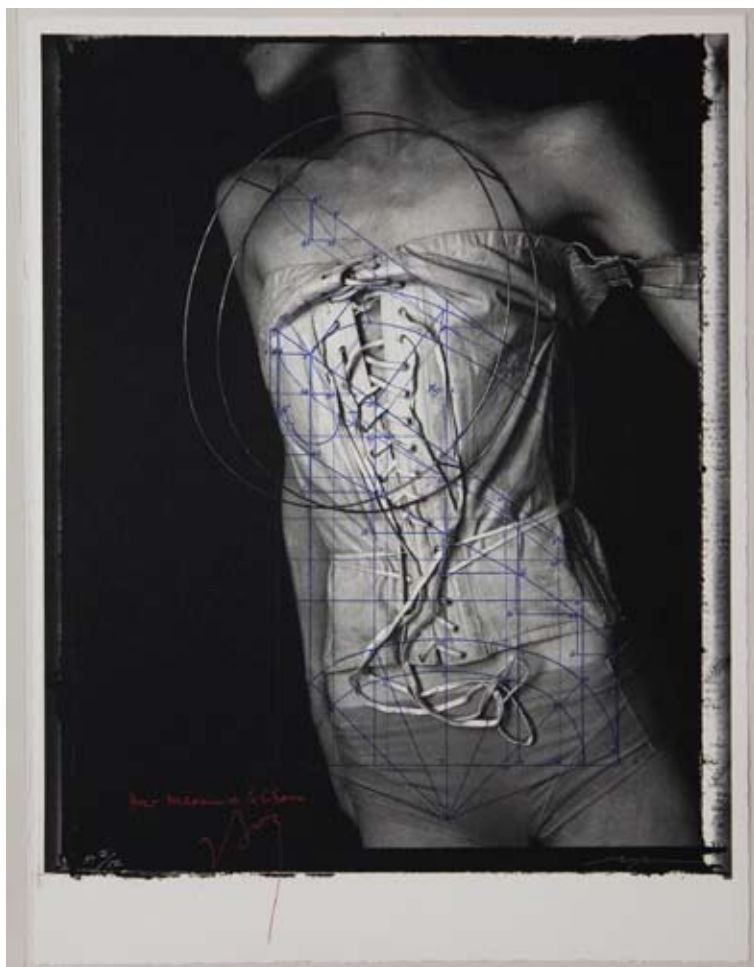
「記憶の果て」

2007 年

岩絵具、顔料、雲肌麻紙

253 × 408cm





北川 健次 KENJI KITAGAWA

会場の下見のために初めて近江八幡を訪れたとき、
私はこの土地が放つ地場の魅力にたちまち引き込まれてしまった。
過去と現在が交差し合う不思議な空間、
水のメチエから立ち上がって様々な物語の断片、
記憶の中の郷愁（ノスタルジア）を、そっとゆさぶってくるこの街の空気——
つまり既視感の深部にこの街にしかない地場が静かにしみ込んでくるのである。
そして、それは私の作品の主題とも深く密接しているのである。
近江八幡の地場の中で作品を展示することによって、
イメージの中で何かが変容して行くに相違ない。
その移ろいの様を私自身、楽しみたいと思っている。





井上 信太
SHINTA INOUE

羊飼いの放牧日記

数えきれない出会いと別れをこの地で経験した。
長い旅路の合間に立ち寄った近江八幡での羊放牧。

西の湖「権座（ごんざ）」での水面に浮かぶ羊
近江兄弟社学園にて子供たちとの羊放牧セッション
広大な田園地帯に羊5頭放牧
八幡山に羊を担いで登頂放牧
夕日と琵琶湖と羊たち
八幡宮のお堀に屋形船から見える羊放牧移動図
羊の足跡：繭羊、仏壇羊、茶器羊、修行羊
とりいしん平とひつじウクレレ楽団ライブ
ガムラン宇宙の旅：へろへろ羊の六時間耐久ライブ
約200個の羊鈴楽器のセッション
羊クッションと羊を数えて眠る会：※羊茶と羊羹
近江八幡の方々との羊放牧未来図

この地にも新しい羊種を植えました。
素敵なお花が咲く事を期待しています。

そこに羊たちは確かに存在していました。

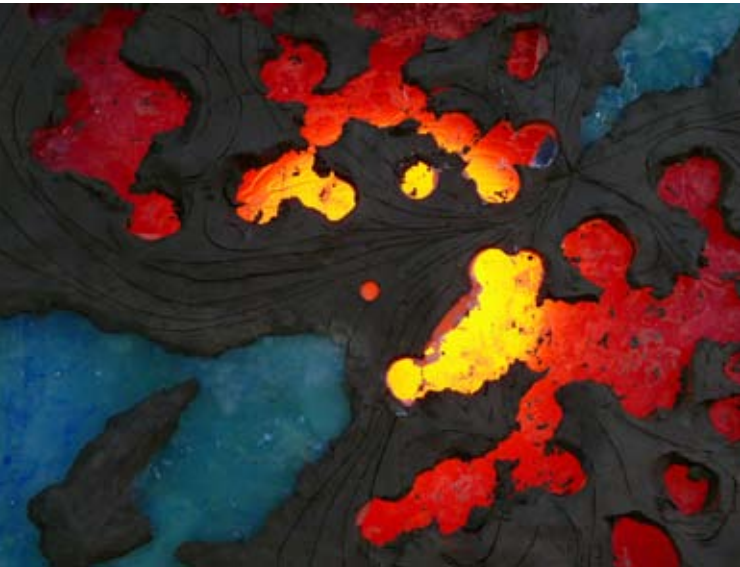
「羊飼いの家：近江八幡 2007」

2007 年

ミクストメディア

平面（大羊：70頭 子羊：250頭 絶滅危惧種：40頭）・映像・音響・照明





ジャン・ピエール・テンシン JEAN PIERRE TENSIN

詩を書くように、絵を描くように、映像を紡げたらと思う。

きのう見た夢をもういちど想いかえして

人形を作り、BOX オブジェを拵え、カメラの前に置く。

そしてファインダーを覗く。

心の奥底、霧の中にかくれていた情景が

ぼんやりと浮かび上がってくるのをじっと待つ。

彼らが動き出す様を見守りながらゆっくりと1コマ分シャッターを切る。

数ヶ月、数年かけ、ようやく出来上がった映像からは

夢の中で見たような、はじまりも終わりもなくひとつづきの風景が流れ

時に懐かしく、痛がゆいような、でもやさしい気持ちがあわさってくる。

「修行中プロジェクト」

2003 - 2007 年

ゼラチンシルバープリント、Cタイププリント

映画「ワンデイエターニデイ One Day Eterniday」

1992 - 2006 年

16ミリフィルム撮影、デジタル編集、11分30秒

クレイアニメーション「迦具土(かつぐち)」より

BIWAKO ビエンナーレ 2007 レジデンス公開作品

共同企画：能勢伊勢雄

展示機材協力：倉敷芸術科学大学 齋藤 等





ヨ ー ゼ ・ ス ラ ク JOŽE SLAK

日本とのつながりは政府留学生として来日し京都で学んだ 1985 年からである。
 その後の 5 回にわたる来日・滞在では尊敬する役行者にゆかりのある大峰山をはじめ
 日本各地を北から南まで旅をした。
 近江八幡での滞在にも多くの素晴らしい出会いがあった。
 今回は漢字のようなモチーフや自然木・ハードボードなどを自由にカットして彩色を施した
 レリーフ状の絵画作品シリーズではなく、近年取り組んでいるホログラムの効果や、薄い布
 の風合を活かしたインスタレーションなど日本で初公開するシリーズを選んだ。
 日本の伝統的な木と漆喰でできた古い壁に対して白くて薄い布でできた作品を張ることで
 ダイナミックな書のように空間を緊張感のあるものに変容させる展示を試みている。





「鳩海 (におのうみ)」 / たねや本店
2007 年
吸着性乳白フィルムに紫外線硬化染料インクによるプリント

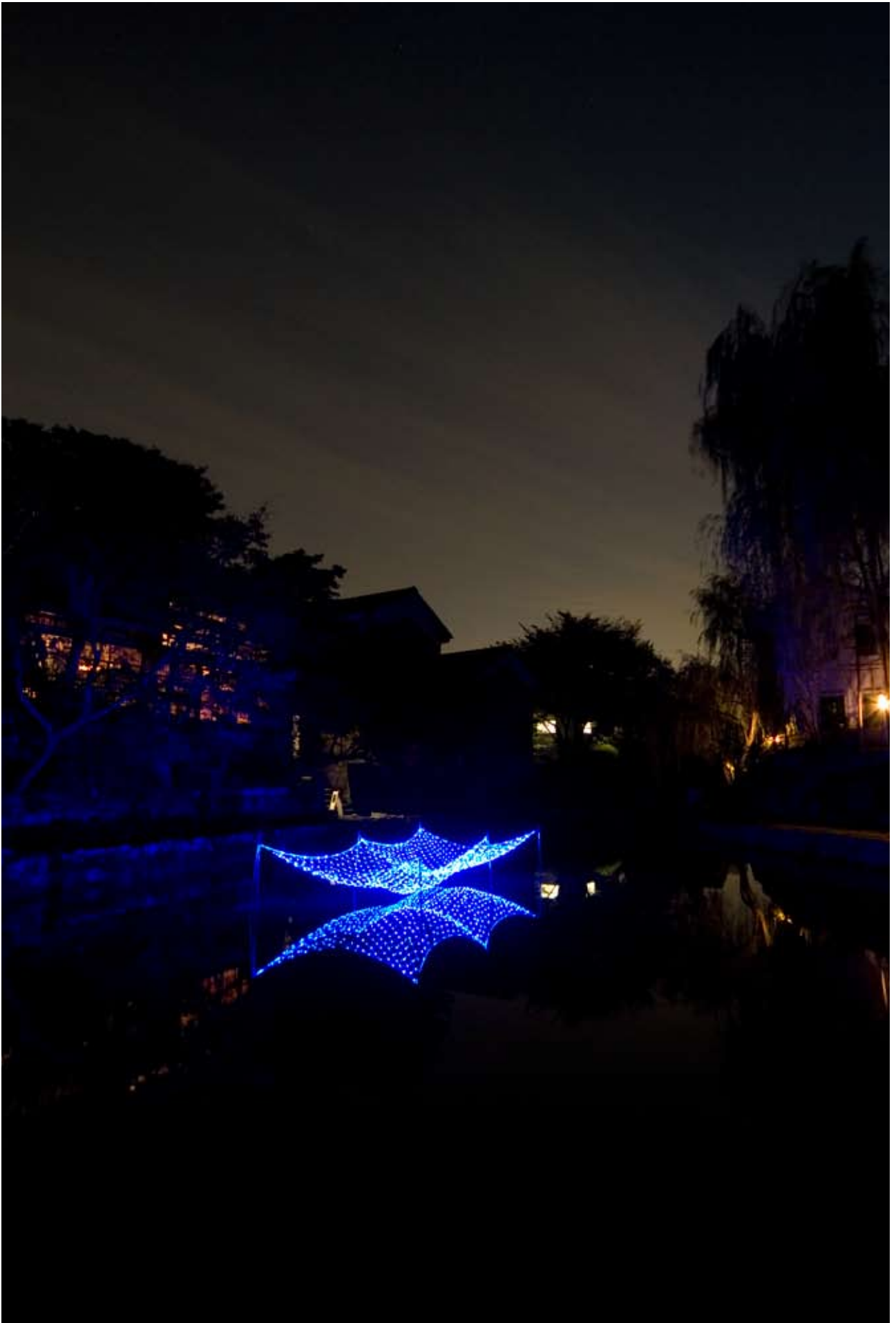
「滴 (しずく) の記憶」 / 茶楽
2007 年
葦紙に顔料プリント

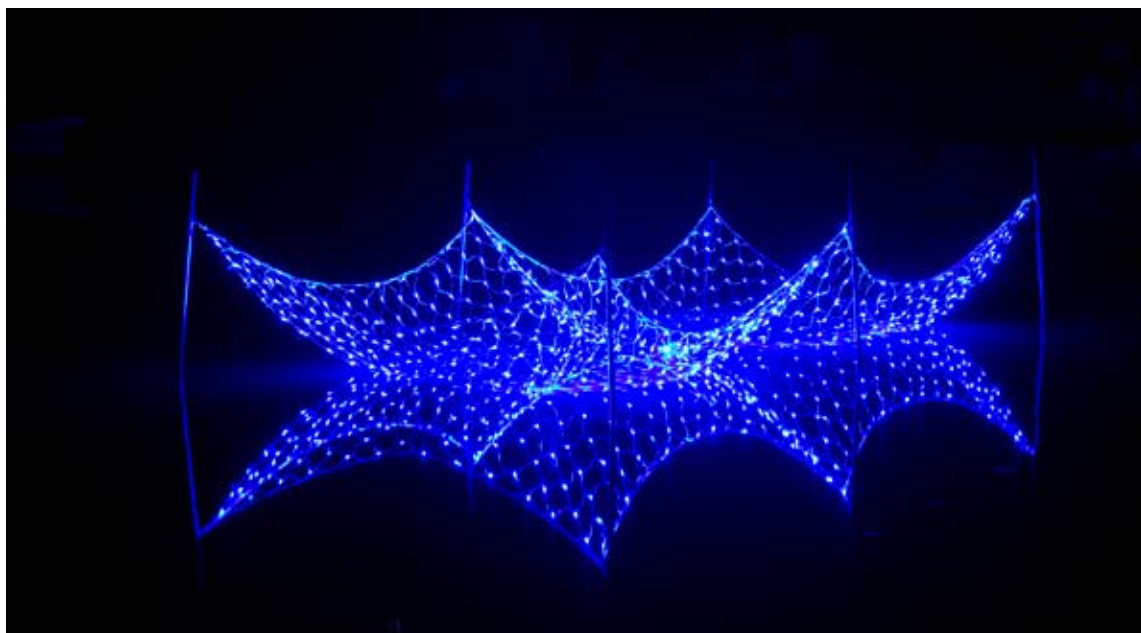


平 垣 内 悠 人 YUTO HIRAKAKIUCHI

かつて二十四の季節と千に及ぶ色彩を持ち、八百万の神々と共に生きた人々がいました。研ぎすまされた感受性を持って、厳しくも豊かな自然と共に生き、そして死んでいった我らの先達。彼らが身を置き、そして目にしたであろう 1200 年前と変わらぬ風景を、また悠久の時をかけて醸成されてきた風景を、文化と政治、経済の中心であった京都と近江を中心に切り取った作品群の中から、今回は BIWAKO ビエンナーレ 2007 に合わせ近江、特に近江八幡から安土にかけての作品を中心に展示させていただきます。古来から美しい和歌に詠まれ、近江商人、文化人を育てた自然と風土を、この土地の持つ懐深さを、その風の香りや温度を、視覚を通じてせめてその一端でも表現できればと思っています。また、このすばらしい会場を快くお貸しくいただきました「たねや」さま、並びにこの大きな作品の出力に関し、最新の印刷機と多くの労力をご提供くださいました「株式会社 精工」さまに深く感謝申し上げます。(「鳩海」/ たねや本店)

自然界の中で、比較的エネルギーが低いことから化合物としては非常に安定的な分子構造をもつ「水」。その安定性故に、中には何万年の間「水」のまま存在し続け、自然の中を循環しているものもあるでしょう。土にしみこみ、木々に吸い上げられ、雲となり、再び地に降り注ぎ、川、湖、海、霧、露となる、一滴の水が様々な姿でこの世界を循環する中で蓄積された「記憶」はきっと気の遠くなるような遙かな物語であるに違いありません。安土の土を使って八幡の地に建てられたこの茶楽で、琵琶湖の葦から作られた紙に焼き付けられた「一滴の水の記憶」をめぐることで近江の Genius Loci を感じていただければ幸いです。(「滴の記憶」/ 茶楽)

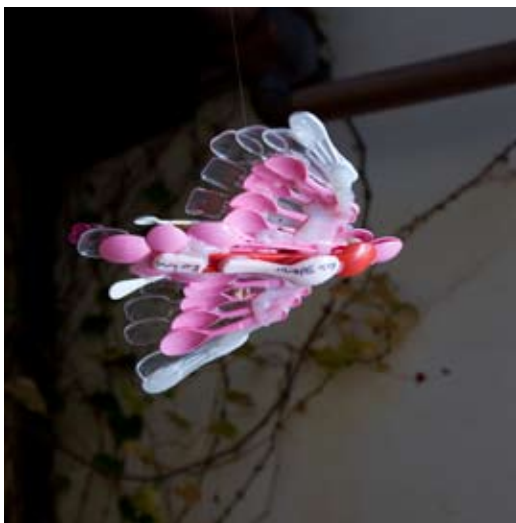




辰巳 嘉彦
YOSHIHIKO TATSUMI

水郷巡りの舟、白壁と柳の美しいかわらミュージアム、
古い木造建築の喜多利邸をはじめとした家並み、
ゆっくりと静かに流れる八幡堀の水面、
初めてここを訪れた時、360° から眺めることのできるこの場所しかないと思いました。
昼間は漁に使う仕掛けと見間違えられるような作品は、
夕方になるとこれらの景色を借景として、空間と呼応するかのように点滅します。
静かに光り、時には揺らぎ、時には鏡のようにくっきりと水面に映ります。
この空間が作品を作ってくれました。
この空間に展示できたことに感謝します。





陶磁器、木工、アクセサリ、漆、ガラス、金属、彫刻、絵画、デザイン、
現代美術、染織、壁画、商品企画、建築、ギャラリー、美術研究所、料理屋、
カフェ、ケータリング、文章、映像、VJ、って区別できないものいろいろ。

サージ + ヨージ SAJI+YOJI

すくう つつく はこぶ なめる たべる

「さじ」と「ようじ」って、

誰もが毎日いっしょの時間をすごす、

ささやかな道具にすぎません。

でも。実は、ものづくりや表現に通じる、

いろんな力を持っている。

あじわう たしかめる わたす 想う 感じる

水から器へ。器から人の口へ。人から人へ。わたしていく。はこんでいく。

そんな魅力に惹かれ続けている 100 人ちょっとの表現者たちが、

その魅力をいろんなカタチの「作品」にして、

この秋、5 回めの展覧会を開きます。

場所は、近江八幡。

ここは、人が生きるために、感じるために、

カラダの内外ですべてのものを はこんでくれる“水”を

身近に感じられる水郷の街。

この街で、「さじ」と「ようじ」が持つ力を

想い想いに表現することになりました。

きつとさいしょのニンゲンが、さいしょにすくい取りたかったにちがいない“水”を

身近に感じながら、「さじ」と「ようじ」の、

はこぶ

という、

力をたしかめたいと思います。

この街を訪ねてくれるあなたへ、いろんな気持ちをはこび、感じてもらう力を

——。

設置協力

クチュールハウス BIB

御菓子司

紙平老舗

澤薬局

山中屋

伴治商店

初雪食堂

高森時計店

内池たばこ店

樹文

八幡酒蔵工房

アトリエ asa

近江八幡ユースホステル

画材ギャラリー 耕栄堂

ワークショップ＋コンサート

workshop+concert



BIWAKO ビエンナーレ 2007 オープニングレセプション

9.29

搬入もすべて終わり、4時より酒遊館でいよいよBIWAKO ビエンナーレ開幕のレセプションが始まりました。テーブルには、酒遊館さんをはじめ、カフェチーム率いる藤さん、また前回からの協力者でありこの夏酒遊館さんの奥に自らの工房を開かれた小関さんが作って下さったおいしそうなお料理や、参加作家のフィリップちゃんお手製のワラビモチなどが賑やかに並びます。

秋の声を聞くとはいえ、まだまだ暑い日が続く中で、額に汗どころか全身汗まみれになりながらの設営、搬入作業、作家そしてスタッフの皆様、本当にお疲れさまでした。展示を終え、あとは公開を待つのみとなった会場のすばらしさはもう筆舌に尽くし難く、みんな感動…。レセプション会場も、“明日から50日間の会期、がんばろぞ！”という鋭気に満ち溢れていました。副市長さんの挨拶の後、全員で乾杯！

続いて、8月のワークショップで、ジャン・ピエール・テンシンさんと子ども達が瓦の粘土で作ったアニメーション作品「三井の晩鐘」を、ジャンさんと中尾堪二氏の生演奏をバックに上映。ワークショップに参加してくれた子ども達も初めて自分達の作品を鑑賞して大喜びでした。さらに前回参加作家の小松正史氏によるピアノ演奏。これから始まるBIWAKO ビエンナーレ2007への期待と興奮が小松さんの心に沁み入る美しい音色と混じり合い会場は大いに盛り上がりました。

酒
遊
館

8.5,7,8
8.9

ジャン・ピエール・テンシン / オープン・ザ・セサミ「アニメーションワークショップ」

かわらミュージアム

8月の夏休みを利用して近江八幡市内の小学生を対象に4日間にわたるアニメづくりのワークショップが開催されました。最初の3日間は今回の参加作家であるジャン・ピエール・テンシン氏による近江の民話“三井の晩鐘”を題材に、瓦の粘土でアニメーションを作成するというもの。子供達は初めての体験に最初はちょっと緊張気味でしたが、ジャンさんのやさしく面白い語り口調にいつしかみんな引き込まれ真剣に取り組みながらもなごやかで、楽しいワークショップになりました。4日目は、オープン・ザ・セサミさんというアニメーショングループの方々によるワークショップ。こちららびわ湖に生息する生き物などが登場する素敵な作品ができあがりました。このときに作成されたアニメーションはBIWAKO ビエンナーレ開催中、“カネ吉シアター”で毎日上映されました。



9.30-
11.18

「カネ吉シアター」

カネ吉別邸

コンセプトは古民家を使ったお座敷映画館。
BIWAKO ビエンナーレ 2007 の開催期間を通して、アニメーション作品専門上映館として開設した。
上映プログラムは、8月にかわらミュージアムで開催されたワークショップで子供たちの作った作品、ビエンナーレ出品作家ジャン・ピエール・テンシンの作品、関西のアニメーション団体オープン・ザ・セサミの作品、成安造形大学講師ヨシムラエリの呼びかけで集められた作家や学生による作品など。後半からは京都在住の制作集団アンテナの作品も加わり、こどもから大人まで楽しんでいただける手作り感覚あふれる多彩なプログラムが組まれた。





西田明男「はりがねおもちゃのワークショップ」

10.7

旧
伴
家
住
宅

針金を使って一筆書きで好きなものを作ろう！というワークショップです。地元の子供から、遠方から来てくださった家族連れ、お年寄りなど、20名程でわいわいと針金に向かいます。「自由に作っていい」という方針に最初は大人も子供も戸惑っていましたが、徐々にのめりこんで2時間ほど没頭してくれました。「学校の授業では決められたものしか作れないけど、ここなら好きなものを作れる」と喜んでいた地元の小学生の言葉が印象的でした。

ティルトクンチョノ 「ガムランワークショップ」

10.13

茶
楽

ワークショップの課題曲は「トロボンバン」。ジャワの衣装を身に纏ったティルト・クンチョノのメンバーによる見本演奏のあと、来場者は早速楽器の前に坐り、楽譜を読む声に合わせて叩いていきます。ボン、クノ、クンブール、ゴンなどの打楽器はメンバーがアシスタントに付き、叩き方を横で教えてくださいました。3～4回も通すと、立派に曲になりました。すごいですね。その後交互に楽器を変わってもらい、ローテーションしながら4セットくらい繰り返しました。ワークショップの後、ティルト・クンチョノの方々がジャワ古典曲の演奏をしてくださいました。ガンサラン～ロニタワン～ガンサラン、ウィルジュン、スワラスリン、ティルト・クンチョノ～アンコール：ガンサラン～ロニタワン～ガンサラン

古い柱がむき出した吹き抜けのある店内にガムランはともよく響きわたり、心地良いひと時となりました。

10.14

小坂橋慶子

「フェルトのワークショップ」

旧伴家住宅

喜多利邸で繭をモチーフにした作品を展示している小坂橋慶子のワークショップでは、羊毛からフェルトを作り、色とりどりの毛糸や羊毛でオリジナルのコースターやランチョンマットを作りました。支持体となる羊毛の上に、好みの毛糸や色の付いた羊毛を置き模様をつくり、洗剤を薄めたお湯の中でたわしで擦ることにより一体化し、一枚のフェルトになっていきます。

最初のうちはなかなかコツがつかめずに苦悶する姿もありましたが、回数を重ねることで凝った作品が出来上がりました。形も様々で丸い形や横長なもの、イニシャルやひよこなど工夫の凝らされた模様の入った作品が出来上がりました。



10.16

上原赫先生 / 大阪府立大学名誉教授・
上原先端科学研究所所長による次世代
太陽電池

茶楽

場所はティースペース茶楽の2階、太い梁をそのまま生かした素敵な空間です。パフェやケーキに飲み物を注文して4時過ぎからゆるりと始まりました。世界のTOPサイエンティスト50名にも選ばれ、講演などで世界中を駆け回ってらっしゃる上原先生ですが、微生物の光エネルギー変換の仕組みや次世代の太陽電池としての実用性などを科学が苦手な者にもわかりやすくお話して下さいました。ジャンルを越えたところから得たヒントやつながりが現在の研究活動につながってらっしゃるというお話が印象に残ります。省電力の発光ダイオードで舞台をつくれる藤本さんとのお話は、地球環境の問題へ進みます。地球温暖化などに対する切実な思いなどが伝わってきて大変興味深いものでした。和やかな雰囲気の中、とてもいい時間を過ごす事ができました。





サージ+ヨージ「きき酒大会」

10.14

酒
游
館

近江八幡唯一の造り酒屋・西勝酒造のお酒に惹かれた陶芸家達や日本酒ファンが中心になって西村さんの御協力をいただいきき酒大会が開催されました。参加者は約50名。酒造の過程を記録した貴重な映像上映に始まり、特徴的な6種類の日本酒と陶芸家の器に盛られた郷土料理や創作料理などのマッチングや100種類を越える個性的な酒器のなかから好みの物を選んで器による味わいの変化を楽しみました。



サージ+ヨージ「クカイってなんやろ？八幡堀吟行クカイ」

10.14

酒
游
館

「俳句」というと、古めかしくて近寄りがたいイメージがありますね。でも現代俳句に接してみると、えっ！なんでもあり？これなら私にだって作れそう！と思ってしまうほど身近な雰囲気。また句会は、お互いの句を感じて味わう場。作者が思ってもいないようなユニークな読み、深読み、誤読（！）それに対する反対意見が出てくるところが、合評の醍醐味。俳人の方や俳句ファンの方、初心者アーティストなど16名が近江八幡を散策して作った句を披露しました。俳人の方々とアーティストの視点の違いなど、合評では熱をおびて盛上がりしました。



サージ+ヨージ 「ピクニック・プロジェクト」

11.11

八
幡
山

待ち合わせの時間にちょうど、かなりの雨が降り出してしまったこの日、集まったのは、ほんの3人。

でも、せっかくだからと、ロープウェイで山頂へ。そして、せっかくだからと、シートを広げ、お弁当もひろげました。（わかさぎの揚げたてテンプラ、ピクルス、キノコのトマト煮、ミニ春巻き、トルティーヤ、野菜の肉巻き、などなど）

こうなったら、せっかくだからと、ワインもあけました。

そしたら、あらあら不思議、どんどん青空になっていきました。前回の「突然ピクニック」からほぼ一ヶ月たって、木々も紅葉し始めていて、

風はちょっと冷たいけど、お日さまのおかげでぽかぽか。

のんびり、いいピクニックだったよ。

みんなも来たらよかったのに～。



10.21

宮嶋哉行による ライブパフォーマンス

西勝酒造搾り蔵（大船真言・展示空間）

improvisation – 即興演奏。それは、その場の空気を瞬時に感じとりながら、内なる音と空気とを繋げていく行為かもしれない。宮嶋哉行のヴァイオリンによるimprovisationを、会場で2回開催した。会場は天窓から差し込む光によって刻々と変化を続ける。またその時の温度や湿度、そして場にいた人が生み出す空気感も、我々が体感する出来事に大きく影響する。言うまでもなく、昼と夕刻の演奏は、全く異なった印象として我々の記憶に刻まれた。その2回の出来事は、その場にいた人にしか体感することができない。それは、100年以上の歴史を持つ蔵、壁に設えた作品、演奏者、聴衆… 皆が、空気をつくり出し、共有し、そして体感していたのだから。



10.21

PHIRIP、北夙川不可止 「ワラビモチ歌会」

ハイド記念館

短歌とワラビモチと近江八幡の街

前回のテーマは遊郭（近代建築）と茶道と電子音楽だったが今回は短歌と街めぐりだった。相変わらず渋め。芋、栗、南瓜、プレーン

お昼からスタート 1.伯爵から短歌初心者への為に、ミニ講座。その後 芋ワラビモチ 2.近江八幡の街散策：みんな街の建築や展示作品の面白さに夢中になり、皆短歌を詠む事を 忘れそうだったが、なんとか詠む。途中休憩で 栗ワラビモチ 3.帰って来て皆の歌を発表、評価をする。初心者から上級者まで入り交じっていた。その後 南瓜ワラビモチ 4.パフォーマンス鑑賞。パロックリュート演奏/黒魔術パフォーマンス/ワラビモチパフォーマンスと、イミ不明のパフォーマンスが行われ、みんな短歌の事をほとんど忘れてしまう。プレーンワラビモチを食べつつ終了 相変わらず何でもアリな会になった。ひとまず短歌の鑑賞とワラビモチが美味しかったので満足++ 色々協力して頂いたピエンナーレ関係者さま、参加して下さった 方々、伯爵、ありがとうございました！！





エリザベス・オジェ基調講演シンポジウム 「子供の未来、アートの力」 10.27

コラボしが大会議室

“こどもの未来—アートの力”をタイトルとし、ボンビドーセンター創立当初より、教育担当チーフとして活躍するエリザベス・オジェによる基調講演の後、嵯峨芸術大学教授の北村正己氏、滋賀県 PTA 会長の岡田隆彦氏、当ビエンナーレディレクター中田洋子を交えパネルディスカッションを行った。オジェ氏はアートを使つての教育のエキスパート、数々の経験をもとにフランスにおける教育の現場を紹介。ディスカッションでは、その講演をふまえ、日本の学校や家庭における教育の問題点などを話し合う。フランスでの日常化したアートの取り組みは、たいへん興味深く、聴衆の中からも活発な質問や意見が寄せられ、充実したシンポジウムとなった。



エリザベス・オジェ、松尾郁子 ワークショップ「みずうみのはな」 10.28

旧伴家住宅

フランスから来日した、ボンビドーセンターのこどもアトリエ / 教育活動統括チーム担当であるエリザベス・オジェと出品展作家の松尾郁子のコラボレーションとなる子どもワークショップが10月28日行なわれました。

松尾郁子作品「lake flower」から、エリザベスが子どものためのワークショップをデザインし、琵琶湖へのオマージュ「みずうみのはな」を子ども達と一緒に作りました。松尾の作品は岩絵の具（岩や珊瑚、貝殻、ガラス）を幾度にも重ね描いています。

エリザベスはその作品から、透明感や花の湧き立つ水面への深さ、また、同じような形でありながら一つ一つ違う魅力を持つ花々を感じとりました。

今回のワークショップではその透明感を軸に、日本の着物や透ける布地、貝殻から作られた絵の具で作った色紙を切り取りラミネート加工で防水したものを重ね、おもしろい花をつくり、琵琶湖を模した水槽に浮かべました。

エリザベスはモロッコやフランスで育ちました。この「みずうみのはな」ワークショップはイタリアや、アフリカにいたときに浮かんだといいます。松尾は大阪に生まれ育ち、琵琶湖の水を飲み育ちました。その湖がもたらした、また、そこに住む人々が脈脈と守ってきたその柔らかな空気への憧れと感謝を描きました。

フランスからやってきた文化も風土も違うところで生まれ育ったエリザベスと、作家、学生、そして子ども達とが、ここ、湖のそばの近江八幡において出会い、共にワークショップをつくりあげました。



10.28 山中透、江村耕市、mamieMu
パフォーマンスコンサート

喜多利邸

秋も深まる中、日暮れとともに、喜多利邸のお庭で山中透、江村耕市、前田秀一、マミームー、によるコンサートが催されました。観客は庭で、母屋の障子に後ろ側から投影された江村さんの幻想的な映像を楽しみつつ、縁側や、庭の植え込みの中で演奏される宇宙的な音楽に酔い痴れました。マミームーさんのグラスハーブ演奏に始まり、山中さんのコンピューターを駆使した洗練された音楽とマミームーさんのテルミン演奏、そして前田さんのマラカスの音が重なり、なんともユニークで、まさに宇宙からの使者による演奏を聴いているような気分。時間を忘れるほどすばらしく素敵なコンサートでした。

Part 1

1 Old Beat Machine#1

2 Old Beat Machine#2

3 Old Beat Machine#3

4 Old Beat Machine#4

演奏：山中透 (pc,Ukulele etc) 前田秀一 (Maracas)

Part 3

1 Drops

2 Keter

3 Old Beat Machine#6

演奏：山中透 (pc, etc) 田中真由美 (Theremin,Vocal etc)



11.18 アニメーション『かつぐち』完成上映、
能勢伊勢雄トークレクチャー、ジャン・ピエール・テンシンと JINMO による演奏

酒遊館

BIWAKO ビエンナーレ 2007 最終日にアニメーション『かつぐち』の完成披露会が酒遊館で行われました。この作品は BIWAKO ビエンナーレ 2007 会期中、かわらミュージアムでジャン・ピエール・テンシンが公開制作していた、古事記にもとづく日本誕生をテーマにしたアニメーションです。JINMO のギター生演奏、ジャン・ピエール・テンシンのナレーションにより、独特の作品に仕上がりました。





E1-Aether(イーサー) パフォーマンスコンサート

11.18

オーストラリア、メルボルンを拠点とし国際的に活動するトニー・ヤップ・カンパニーは、様々な文化背景を持つアーティストにより構成されている。今回は、八幡堀界限で採取したサウンドスケッチによるSEと近江八幡の葦等の天然素材と新蔵の吹き抜きの構造を利用したインスタレーションを舞台とし、マレーシア伝統民謡の要素を取り入れた歌およびマレーシア古来のシャーマニスティックな要素を合わせもつコンテンポラリー・ダンスにより、オーストラリアーアジア間を横断する、音と視覚によるサイトスペシフィックなライブパフォーマンスでBIWAKO ビエンナーレ 2007 の閉幕を飾った。ダンス & ディレクション : Tony Yap、サウンド : Tim Humphrey & Madeleine Flynn、美術 : 太田奈緒美、ボーカル : Ria Soemardjo。ライティングワークで岩村原太と魚森理恵がコラボレート。Tony Yap Company : <http://www.tonyyapcompany.com> 後援 : Multicultural Arts Victoria / Australia Council for Arts / Kultour

西
勝
酒
造
新
蔵

BIWAKO ビエンナーレ 2007 会場一覧



旧伴家住宅 江戸期より麻布・畳表・蚊帳を商う。築約170年。明治時代になって当時の八幡町に譲渡してから小学校・役場・女学校と変遷。戦後は近江兄弟社図書館として使用され後に近江八幡市立図書館となり、移転に伴い平成9年その役目を終了。その後平成16年4月より市立資料館の一部として開館。



喜多利邸 八幡堀に面する元畳問屋の所有した町家。築約100年。現在(NPO)エナジーフィールド拠点、アートインレジデンス、寺子屋等に活用。



ハイド記念館 1931年メンソレータム創業者アルバート・アレキサンダー・ハイドの夫人からの建設費用の寄付によりウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計で清友園幼稚園の園舎として建設され、2003年まで、近江兄弟社学園幼稚園として使用。2000年に国の登録有形文化財となった。



カネ吉別邸 元材木商。築約100年。現在(株)カネ吉ヤマモトフーズ所有。



西勝酒造搾り蔵 創業1717年の造り酒屋“西勝酒造”の元搾り蔵。



旧吉田邸 近江地方で特徴的な部戸と貫見せを持った築約100年の古民家。



かわらミュージアム 八幡瓦として有名な瓦製造業者が軒を連ねたエリアをかわらミュージアムとして再建。



八幡堀 幅約10メートル、全長6キロに及ぶ運河。安土桃山時代に豊臣秀吉が八幡城を築城した際、城下町の都市計画として整備されたもの。重要伝統的建造物群保存地区。



酒游館 西勝酒造の元酒蔵。ライブハウス、多目的空間、カフェとして15年前にリニューアル。近江八幡の文化発信基地の一つ。



浜ぐら 西川甚五郎邸の元浜蔵。現在はカフェとして営業。



尾賀商店 築約100年。戦前砂糖問屋、戦後履き物卸商。2007年11月よりセレクトショップ兼ギャラリーとして営業。



たねや 全国展開しているお菓子の「たねや」近江八幡駅前店。



西勝酒造新蔵 西勝酒造の新蔵。現在もここで日本酒の仕込みが行われる。



茶楽 約160年前の材木倉庫を改装。八幡堀を眺めながらくつろげるカフェ。





